発掘だより

さぬきこくふあと 讃岐国府跡（坂出市府中町）

11 月 1 日から讃岐国府跡の発掘調査を始めました。今回の調査地は史跡指定地の北西約 250m の場所です。この場所は推定南海道である「セイリュウ」と呼ばれる東西道路を西に延長した先にあたります。これまでの調査では、鼓岡神社がある丘陵の裾に道路跡と考えられる遺構が確認されており、今回の地点でも同様に道路跡が見つかる可能性があります。今後の調査成果にご期待ください。

▲調査風景

▲位置図

展示のご紹介

テーマ展　**讃岐国府跡ヒストリア 2** －讃岐国府跡探求事業の調査成果－
日　時：2022 年 1 月 11 日（火）～ 1 月 23 日（日）
場　所：観音寺市立中央図書館
主　催：香川県埋蔵文化財センター
共　催：観音寺市教育委員会

香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
tel. 0877-48-2191　fax.0877-48-3249
https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/maibun/index.html

いにしえの讃岐　No.108　2021 年 (令和 3 年) 12 月発行

▲ 綾川（坂出市林田町付近）から見た金山

▲
金山産サヌカイト製の石器（東坂元北岡遺跡出土）

いにしえの讃岐

香川県埋蔵文化財センター情報誌

NO.108

令和３年度　四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展

四国の風土と暮らし－山から四国を眺めてみた－

日　時：令和３年９月26日（日）～12月12日（日）　土・日曜・祝日は休館　　観覧料：無料

四国は平野が少なくその大半の面積を山が占めています。このような風土に暮らしてきた先人は山の恵みをうまく暮らしに取り入れてきました。また、山の峠や尾根を通って、文化の交流が行われてきました。

この展示では、山とともに歩んできた四国の人々の暮らしについて紹介しており、ここでは展示の中で紹介された香川県の遺跡について取り上げます。

▲ 香川県の地図と遺跡

山で生きる～山の恵み～　東坂元北岡遺跡（丸亀市飯山町）

香川県で産出する安山岩の一種にサヌカイトという黒色緻密なガラス質の岩石があります。その打撃音から香川県では古くから「カンカン石」と親しまれてきました。このサヌカイトは高松市と坂出市の間にまたがる五色台、坂出市の金山や城山に分布します。サヌカイトは非常に硬く、割ると切り口はナイフのように鋭いため、旧石器時代から弥生時代まで石器の材料として西日本の各地に運ばれました。

▲ 石包丁出土状況

丸亀市飯山町の東坂元北岡遺跡は金山の 3km 南西にある弥生時代の遺跡です。この遺跡では弥生土器とともにサヌカイト製の石器や剥片が多量に出土しました。（表紙 写真）これらを詳細に観察したところ、この遺跡では金山で産出したサヌカイト原石を加工した板状の剥片を持ち込み、打製石包丁などの石器を製作して、他集落に搬出していたことがわかってきました。

山で生きる～山岳信仰と修験者～　中寺廃寺跡（まんのう町造田）

古代において山は仏教などの山岳信仰の場でもありました。奈良時代後半、諸国に国分二寺（国分寺・国分尼寺）を建立して「鎮護国家」の目的で仏教を推し進めましたが、ここで教学をおさめた僧侶は深山に入り修行を行って法力を強化することが必要とされました。このため、奈良時代後半から平安時代にかけて山頂や山腹（斜面）に寺院が建立されるようになりました。これらは山林寺院と呼ばれています。

中寺廃寺跡（なかでらはいじあと）は、香川県仲多度郡まんのう町の大川山（だいせんざん）の東側の山腹（標高約 700m）にある平安時代初期（８世紀末葉～９世紀初頭）に建立された山林寺院跡です。発掘調査では、塔や仏堂などの建物跡が確認され、銅製錫杖（しゃくじょう）や須恵器多口瓶（花瓶（けびょう））などの仏教関係の資料に加えて、官人（役人）のベルトの飾りである石帯（せきたい）が出土しました。

奈良時代には僧侶の山林修行には国の許可が必要であったように、その活動は厳格な法的規制がなされており、地方における山林寺院の建立や活動も、国府の管理下にあったと考えられます。出土した石帯は、中寺廃寺が讃岐国府の管理下おかれていたことを物語っており、讃岐国府は、中寺廃寺において国内の疫病消除などの祈願を担わせていたと考えられます。

▲ 平安時代の中寺廃寺（復元図）
提供：まんのう町教育委員会　監修：山岸常人　作図：松本正己・国松えり

▲ 中寺廃寺跡の多口瓶（たこうへい）
（香川県仲多度郡まんのう町）
写真提供：まんのう町教育委員会

山を行きかう人・モノ・情報～行きかう技術や商品～

西村遺跡（香川県綾歌郡綾川町）と　土井遺跡（徳島県東みよし町）

香川県綾川町付近に広がる十瓶山（とかめやま）窯跡群には古墳時代から鎌倉時代にかけて須恵器や瓦を焼いた窯跡が 100 基以上あります。西村遺跡はこの窯跡群にある遺跡で、平安時代から鎌倉時代の集落跡や窯跡などが検出されました。西村遺跡を含むこの窯跡群で生産された須恵器の中には外面にヘラ磨（みが）き調整を施すなどの特徴をもつ西村型須恵器椀と呼ばれるものがあります。

徳島県の西部にある東みよし町の土井遺跡ではこの須恵器椀とよく似た椀を焼いた窯跡が見つかりました。この遺跡は吉野川の北岸の平地にあり、讃岐山脈を挟んで、十瓶山窯跡群の 20km ほど南にあります。窯跡は平安時代の終わりから鎌倉時代初めごろに築かれたもので、焚口（たきぐち）の後方に円筒形の焼成室がある煙管状（きせる）窯で、西村遺跡でも同じ形態の窯が多数見つかっています。土井遺跡の窯やその周辺からは須恵器碗を中心に、杯（つき）・皿などの破片が出土しました。須恵器椀を観察すると、西村型須恵器椀と類似しているのですが、焼成の仕上がり方や製作技法の一部が少し異なっていることがわかりました。このため、土井遺跡で須恵器を焼いたのは十瓶山窯跡群から移動した工人ではなく、土井遺跡の工人が西村型須恵器椀の製作技術を会得し、生産したと考えられています。土井遺跡の調査によって須恵器椀の製作技術も讃岐山脈を越えて、伝播したことが明らかになりました。

◀ 西村遺跡の須恵器椀
（香川県綾歌郡綾歌町）

◀ 土井遺跡の須恵器椀
（徳島県三好郡みよし町）
写真提供：徳島県立埋蔵文化財センター

▲ 土井遺跡の土器窯　写真提供：徳島県立埋蔵文化財センター